

## 🍀 ステイク先生との最初の3年間

設楽靖子

ステイク先生との思い出を書くとなると、個人的な昔話になるし、私が先生に出会った経緯は四方山話で繰り返してきたことではあるが、この協会会員の世代も交替した現在、先生が Tokyo Conrad Group と命名なされた頃の「始まり」を書いておきたい。

1994年当時、私は大学での英文学専攻者やその関連学会とは全く縁がなく、コンラッドの作品・生涯への興味は、職場（アジア研究の図書館）で東南アジア研究者たちの口からときどき出てくる作家として、また他の動機もあり、少しずつ「趣味」として読み始めていた。そうした中、Hans van Marle なる人物による“Joseph Conrad in Indonesia”という unpublished typescript が自分には必読文献であると理解した。この人物の刊行物には、所属として常に Amsterdam とのみ記されていた。どのようにしてこの人物に連絡を取るか。たまたま職場で知り合ったインドネシアの国際海洋法学者（コンラッド論もある）を介して氏のアムステルダムでの自宅住所がわかり、その住所宛に、typescript を入手したい旨、手紙を書いた。しばらくして、ご本人からそのコピーが届き、同封の手紙には、「東京の日本女子大にいるステイク氏に連絡してはどうか？」とのこと。たしか数ヶ月ほど逡巡した後、何を期待するのかわからないまま、自己紹介と挨拶程度の手紙を投函した。すると、翌日、おそらく先生の手元に私の手紙が着いて即のタイミングで電話があり、「すぐに会いましょう」とのこと。日を置かず研究室に行くと、“Have you ever been to Borneo?”という質問から面談が始まり、その場で、「Yoko に連絡してください。読書会を始めましょう」と提案があった。そして、まもなく、1回目の読書会となった。これが1994年10月のこと。作品は、「最も短い」という理由で“Lagoon”であった。素人の私にも扱いやすいようにという配慮であったろう。たしか、Yoko さんの知り合いも同席して4名だった。この初回にて、読書会を月1回のペースで継続しようという手ごたえを相互に確認できた。これが「始まり」である。先生はちょうど Cambridge Companion を編集中であり、私はコンラッド研究の中核部分へ一気に繋がったことに目が眩むようであった。もちろん、私がステイク先生に手紙を出さなくても、その時期に「John と Yoko」によ

る読書会が始まっていたろうが、別の展開になっていたのではなかろうか。

この読書会が月 1 回で始まってから 3 年間、私にはそれから長く続く 2 足の草鞋であったが、これ以上は望めない導き手を得て、幸せな 3 年間であった。大学での授業を聴講させてもらったとき、先生が学生たちに向けて、「原文を読んでそこにシンボルやアイロニーや心理の動きを読み取ったとき、あなたは文学を読んでいるのです」といった表現があり、私はそれを恩寵のように書き留めた。文学畑を歩んできた人たちとは異なる私のアプローチ（Dr Willis を一次史料から探るなど）を最初からずっと後押ししてくださった。1997 年秋に先生が日本を去られる頃には、私には「別の指導教官」を探す必要があることはわかったが、そこからは別の話になる。

それから 20 年近くたって、2014 年 8 月、カナダ・バンクーバーでのコンラッド学会に出かけたのは、久々に先生に会うためでもあった。その 6 月に「余命数カ月」の診断を受けていらしたことは、直前に知った。私は淡々と近況報告をして、最新の学界情報をいただいて来た。

ここまでは、私の個人的な思い出話だが、先生から日本のコンラッド研究へ一つ具体的な置き土産がある。「コンラッド作品翻訳リスト Japanese Translations of Conrad's Works, 1914-1995」である。1995 年当時、図書館の検索はオンラインなどではなく、検索道具は各図書館が出す所蔵目録とカードカタログであった。その制約の中で、可能な限り「網羅的」で、かつ現物点検をした「完全版」をめざした。ステイブ先生からは、「そのまま海外に紹介できるように bilingual 版で作るべし」というアドバイスと実質的な協力があつた。それを当時の Newsletter, No. 2 (1996) に載せたが、そのままになっていた。それを今回、井上真理さんにデータ更新をお願いし、「1904-2017 年版」として蘇らせてもらった。1995 年と 2017 年とでは、検索方法の違いは雲泥の差で、たとえば、当時は現物確認できなかった戦前の文献も、容易に所在・現物確認が可能であった。近々ネット公開の予定であるが、そのプリント版を本誌に載せて、先生へのお礼に代えます。

あの時点でステイブ先生に出会えたこと、それを serendipity と呼べばよいのだろう。

（しだら やすこ 東京女子医科大学 講師）